



ガラスのズプーン
the short tales

黒野 ている

ガラスのスプーン

「銀のスプーンをくわえて生まれてきた」という 古い言葉がある。

生涯食べるものに困らない、つまり高貴で裕福な家庭に生まれ育ったことをいうのだ。
(裕福なだけでなく、銀を使うのは意味があるので高貴な身分であることも付する)

銀のスプーンはこの世にそうたくさんは無いはずで、銀のつもりでも人それぞれに鉄やアルミや木のスプーンをくわえていたりもするのだろう。

陶器のスプーンはあるが、なぜかガラスのスプーンはあまり見たことがない。

ガラス製のマドラーは存在するし、割れたときの危なさならガラスのカップやグラス、お皿も同じはずなのに。

ないものねだりではないが、もしガラスのスプーンがあなたの手元にあったなら、どんなデザインが思い浮かぶだろう。

流線を型どったノーブルなデザイン、美しい色彩の華やかなもの、それともスワロフスキーのようにキラめくタイプ？

使い勝手のいいフォルム、落としても壊れにくい複合素材・・・

美しさ、機能、耐久性。それをすべて兼ね備えたもの。

求め続けるときりがない。

世界に二つとない、自分だけのガラスのスプーンのイメージは、もしかしたら自分自身の理想の姿なのかもしれない。

銀のスプーンが幸せかどうかは、本人以外には誰も知る由もない。

たとえプラスチックのスプーンであっても、本人が幸せだと感ずる心の余裕はなによりも美しい。

いつか自分の生き方の結晶のように、ガラスのスプーンを残せたら素晴らしい。

今想うイメージとは違っても、それぞれの作りあげたスプーンはきっと誰かの心の目に映ることだろう。

どんな宝石にも真似のできない、唯一無二のいのちの痕跡がそこにあるのだ。

pianoforte～ピアノフォルテ

あの店にある ピアノが呼んでいる。

内部の構造に金属の部品を使っていないというドイツ生まれのそれは、柔らかく包み込むような音色を奏でるのだと女主人は言った。

仕事の取材で訪れたその店は、雨に濡れた路地裏の雑多な建物の中で、そこだけ凜とした佇まいを見せていた。

「私が譲り受けたんですよ。」

女主人はそういうとピアノの蓋をゆっくり開けた。

「それはそれは古く、調律も受けずに暗い部屋に閉じ込められていたんです。傷をつけずに埃を払うのが大変でした。」

アップライトで飾り気もないが、ペダルは使ったあともあり、譜面台にも細かな傷がみえる。

よかったら音を出してみて、と彼女はいたずらに言う。

さわりたい、私は強く思った。

でも なぜか私の手は動かない。

「素敵なピアノですね。」

そう言うのが精一杯で、また私は押し黙った。

このままチャンス逃がすのではないかと、うっすら冷や汗すらかいていた。

黒い塗装の奥に潜むものがどこかで私を挑発する。

さわれるものならさわってごらんとピアノは言う。

この老成した悪魔に触れたら、私の指は魔法が解けるまでピアノを弾き続けることになるだろう。

そんな気がして私は女主人を見た。

「大切なピアノなので、私のようなものが触るわけにいきません。」

私がそう言うと、女主人は少し残念そうな顔をした。

「きっとあなたなら、このピアノが気に入ってくれると思うの。なんだか云われのあるものらしくて、ひとを選ぶんですって。」

彼女にも見えているだろうか。

このピアノが さあ、触れてごらんと手を出して招くさまを。

「奥様、このピアノには時間をかけて接したいと思います。」

女主人は穏やかに笑みを浮かべ、それがいいかもしれませんね、とピアノを見つめる。

「ここでピアノを弾かせてくれと言う方は皆、臆さず普通に弾いていかれます。ピアノもピアノとして彼らに接している。

でも 今日はこのピアノがあなたを好いているようだったので、もしかしたら、と思ったんです。

時間をかけて...いいことですね。

最良の相手とはそう接するべきなのかもしれません。」

「また お休みの日にでもお立ち寄りください。

ここで演奏会もありますので、一度このピアノの音を聞いていただくのもいいかもしれません。」

女主人は続けて言った。

このピアノ、好き嫌いがあるようで、人によって音色が違うんですよ。

わかるような気もする。

これは漆黒の生き物だ。

穏やかな音を出しながら、その内側で情熱をどのような形で表現しようか未だ迷っている生き物だ。

もしお気に召したなら、と階段を降りながら

「あなたにお譲りします。もう、私には扱えません。」

女主人は深く柔らかな表情だった。

まだ水滴の残る傘をさして、私はその店を辞した。

そぼ降る雨は あのピアノの想いにまとわりつき、私を捉えて離さない。

取材で歩き回っていると、ほんのたまに生きているような物に出会うことがある。

視線を感じて振り向くと、そこには意識を持った物が私を呼んでいる。

それを認め、立ち止まることもあるが、大抵は向こうから視線を外して何事もなかったかのように押し黙る。

私は彼らの求めるものではなかったというところなのだろう。

雨は変わらないテンポで傘を打ち、心地よい不協和音を響かせている。

駅までの道は私に考える時間を十分与えてくれたようだった。

あのピアノに また逢いにいこう。

音を聞いたわけでもなく、触れたわけでもない。

だけどなにか気持ちが通ずるものがある。

さっき貰った演奏会の案内がバッグの中にある。。

ほとんどは土日の夜だが、珍しく平日にあるジャズのトリオに目が留まる。

あのピアノの昼間の音を聞いてみたくなり、私は携帯の入っている左のポケットに手をやった。

コーラにレモン

「コーラにレモン入れるか・・・って？」

古いシェードランプの灯りは 彼女を夢見がちな表情にする。

光の加減で まるで別のひとになる。あるときは深窓の令嬢、またあるときは無垢な少女。
おおらかな海に見えることもあれば、切り立った絶壁のようにひとを寄せつけないことも。
良くも悪くも 彼女はそういうひとだ。

彼女は 問わず語りをはじめ。

不思議なこと 思い出させるわね

私 小さい頃からコーラは苦手だったのよ

そのころの彼がね、コーラが大好きなひとで 缶じゃなくて瓶のほうが好きだとか

コーラの瓶並べたいために アンティークのような冷蔵庫捜したり

王冠集めたり コーラの製造所にこだわったり

・・・ どこかの伏流水がいいとかね

拳げ句の果てにボトルの自販機までオークションで買って

でも 私はコーラ苦手なの

炭酸？

それは大丈夫。だってレモンスカッシュなら飲めるんだもの

でもやっぱりケンカになるわけ いつまでコーラ・フリークスやってんの？って

アメリカでもどこでも行ってくればいいじゃない？

もしかしたら 違う味がするかもよ って言ったらね

わたしのグラスを取り上げて

コーラにレモンを入れたら？ って

こういうことって考えたことある？って聞くの

『ぼくはコーラに氷をいれることすらしないけど 氷の上にそそぐ音がたまらないという奴もいる
南のほうへ行けばぬるいコーラをうまそうに飲んでる
ウィスキーをいれる奴、カルピスいれたら飲めた奴 楽しみ方は自由だよ
コーラは飲めないって決めてかかるより 苦手なものに好きなものをあわせたらどうなるだろって
そのほうが楽しくない？・・・ほら』

レモンカッシュに浮かんでるレモンをコーラのグラスに絞って 彼は私の前に置いた

はじけたしずくがあたり一面に広がり、コーラの香りが隠れる

目をつぶったら コーラじゃないみたい

これ いけるかもって思って グラスに口をつけた

あ 初めて飲めた

うまれて初めて コーラがおいしいと思った

もう信じられなくて彼に聞いたの

『レモンひと切れで何が変わったの？』

すると彼は

『レモンで飲めなくなる奴もいる
てことは レモンで飲めるようになることもある オモテとウラがあるんじゃないかって』

って笑ってた

『あ、もしかして私実験台だったの？ ひど〜い！・・・でも おいしい』

私はそれからコーラが大好きになって

早飲み競争にも出るようになって

全国大会で優勝して

彼にアメリカ一周旅行をプレゼントしたわ

ねえ すごくない？ レモンひと切れ 入れるか入れないか

考え方で人生が変わること、ホントにあるのよねえ

だから あなたも考え方変えてみたら？

って 彼女は シェードランプの暖かさにほっこりしながら まどろみにつく
そんな彼女のかたわらで寝そべりながら 俺は言った。

「誰に言ってんだ、見当違いだよ。第一 失礼だな、俺の生き方に指図するなんて。」

俺の言葉も聞かずに寝入ってしまった彼女のほほを しっぽの先でひたひたと叩きながら思う。

ネコに「考え方」なんて どこにもありゃしないよ。

「こんな時間に来るなら途中でエンジン切ってらっしゃいよ！」

窓を開けた彼女は、白いビスチェに山羊革の黒のパンツを合わせた姿で睨みつける。

「やっと機嫌の直ったネロのバイクに、おまえ文句があるのか？」と俺は笑う。彼女も笑みを返す。

「あなたの音は10km先からでも分かるわよ。」そう言うと彼女は音のしないように窓を乗り越える。

「お願い、ママたちが起きてしまうと大変なことになるの」

彼女はヘルメットを受けとり、夜の道を先に歩き出した。

1000ccを超えるバイクは、押して行くにはかなりの重さだ。しばらく行った先でエンジンをかける。

彼女が振り向く。

「ダメって言ったでしょう？」

後ろに乗れと合図する。仕方ないという顔つきで、俺の後ろにつかまる。

すでに暖まっていたエンジンは、軽く吹かすだけで滑らかに加速していく。

ヴィンテージを何度も修理をし、ここへ来ようとするたび、雨に見舞われていた。確かにこの時期、こんないい天気はなかなかない。

彼女の肌を感じるのは数年ぶりだ。坂を登ると、小高い山の上からは天の川が見える。

「晴れて良かったわ。ここ数年雨ばかりで。ネロのおじさんは元気かしら？」

このバイクの生みの親のネロの店主が2年前に亡くなったことは、彼女には黙っていよう。

「ああ、元気だよ。きみによろしくと。」

「良かったわ、夢に見ることがあるのよ。あなたのバイクを修理してやれないって嘆くの。そしてまた飲みに行こうって。」

夢でも女のところにしか出ないのか。生粋のイタリア人だな。

「あなたにもなかなか会えないけど、夢にまでは現れないわね。どこで何をしているやら。」

「何を言ってるんだ、だから今日はこうしておまえに会いにきたじゃないか。」

「あなたは言葉が足りないわ。」

「俺はイタリアで一番口下手なんだよ。」

「それだけかしら？」 2年もほって置いて...と彼女は俺を詰(なじ)る。

「面倒な女は嫌いだぜ。」 というと

「あたしもよ。愛のない男は嫌い。」 探るような目で俺の顔を覗き込む。

瞳は緑がかった碧、髪は少し暗めのブロンズだ。唇の横に小さな星のようなほくろがある。暗くてもそんなことなら覚えている。それで充分ではないか。

「なぜいつもこの日なの？ 晴れた日ならいくらでもあるのに。」

それは何度も話したような気がする。 だとしたら彼女の心には届いていないということか。 エスプレッソに流したミルクの帯は手に届きそうなほど近いのに、アジアのレジェンドなど 所詮戯言でしかないのか。

彼女にしてみれば、俺はネロの店に立ち寄る、彼女は早めのバカンスに家族でここへ来る。 たったそれだけのことなのだ。

「なにもバカンスの時期だけ、お互いにイタリアで落ち合うことはないのにね。」

会えなくとも、近くにはいられるのに。 彼女にはその考えは通じないようだ。

「きっと間違いだったのよ。」

この世に間違いがあるとするなら この明るいイタリアの星空の下で 語り合う俺たちが、日本人とドイツ人だってことだろうな。

やれやれ・・・

☆ Via Lattea はイタリア語で「天の川」。西欧には七夕伝説のようなものはありません。

初冬

雑貨を選ぶように 事務用品をいくつか手にして
僕の前に差し出す
いつもの制服ではなく
ラフな格好だ

「これ 新しいバージョンも出てますよ」
少し古ぼけて曇ったクリップのパッケージを持ち上げて 彼女に言う

「いいんです。使い慣れたのがいいの。新しいのが混じると落ち着かなくて」
視線を下げたまま 彼女が答える

僕はそのまま袋に入れる
「今日は仕事じゃないんですか？」

彼女が無言のまま 目を上げる

「制服じゃないから」

「ああ・・・」
やっと意味がわかって 微笑む
「引越し なんです」

僕の手が 一瞬止まっただろう

時間にすれば ほんの一瞬

今度は僕が目上げる番だった

「新しい事務所に 引越し。今のところが建て直しすることになって・・・」

言葉がとぎれる

「ここへは なかなか来られなくなる、かな」
うつむきながら 彼女の口元は笑っている

「そうなんですか」

とりあえず オトナの裁量で相槌をうつ

「残念ですね」

「ここへ来るのは 楽しみだったの。
他所は売れなくなるとすぐ置くのやめちゃうけど、ここはいつまでも置いてくれる。
私しか買わないものも多かったでしょ？」

悪くなるものでもないの、と小さくなった声で答えた

本当は 彼女が買いに来るのを知っていて
他所に置いてないのも知っていて
それで

「だから ありがたかった。これからお買い物には苦勞するかもね」

彼女のためにとった在庫も あるといえはある

もしよければ、と口をついて出る
「配達しますよ、お電話いただければ」

メモに店の固定電話と

僕のアドレスを走り書きする

彼女の 赤い鬪牛が走り去るのを

放心状態で見届ける

今日は ギャンブラーだな

どこへ引っ越すのかも聞いてないのに
否定することもなく 何も言わず店を出ていった彼女

2度と逢えないなら もっと言い方あったらうに

それは スリルよりも後悔に変わる
そして 心の中で封印される

午前中の忙しい時間に電話が鳴る

しばらく鳴らしたままで、11コール目で電話に出る

『あの、お久しぶりです』

この店に そんな電話がかかってくることはない
僕は もう一度店の名を伝える

『この前 配達して下さるっておっしゃったので』

なぜこの声がすぐにわからなかったのだろう

彼女だ

『お忙しいだろうからメール送ろうとしたら 送れないみたいで』

ああ 手書きのアドレスの一部が違っていたらしい

『いつでもいいんですけど』

彼女のほしそうなものなら 何でも揃っている

「夕方でもよければ 今日早めに店を閉めてお届けしますよ」

『届けてほしいのは』

霧の朝は 午後から気温が上がる。 うっかり忘れてニットを着込んできたことを後悔する。

石畳の路地を抜けて大通りに出ると、一台のメルセデスを停める。

「ガール・ド・リヨンまで おねがい」というと、運転手は短く返事をする。

車の中でさえ日差しが眩しい。

「暖かくなったわね。少し窓を開けてもいいかしら」

「どうぞ マダム」

「ありがと」

ダスターコートを脱ぐと、この日差しには場違いなニットがあらわれる。

窓から入る風に やっと気分が落ち着き、私は少し混雑した道の風景を見ていた。

「このあたりのレストランに、以前来たことがあるわ」

「ここいらのレストランといえば...」

タクシーの運転手は、店の名前をいくつかあげた。私には憶えのない名前ばかりだ。

「お店の名前は覚えていないの。初めて連れてきてもらったレストランで、なにを食べたのかも」

いつもはタクシーに乗って話すことなどないけれど、今日はなんだか話したい気分だった。

「季節はいつ頃なんですか？」

「たしか、秋から冬だと思うわ。お店を出たときに寒かった気がする」

「じゃあ野禽や煮込があったでしょう」

「そういえば なにかの林檎酒煮込がメインだったような...」

「ノルマンディ出身のシェフならウサギのシードル煮込は得意料理ですね」

「ああ、そうだったかも」

「とても美味しかったんじゃないですか？」

「もうね、味もなにも...初めてのデートだったのよ。とにかく緊張してたわ。若いころの話よ」

幼い記憶が ほころびてくる。まるで手編みのニットがほどけるように。

長いバカンス明けに知りあったから、きっと秋よりも後なのは間違いない。

そういえば 今日着ているのと同じような淡いクリーム色のコートを、その日のために新しく買ったことを思い出す。君の髪の色にとっても似合うと言ってくれたのは彼だったような気がする。

今なら博物館にしかないようなシトロエンも、私には光り輝くリムジンだったのだ。

「変ね。いつもは彼と何気なく話せたのに、二人きりになると急に話せなくなるの。ムードもなにもないわよ。私、ワインのグラスを倒してしまって」

車は渋滞にさしかかる。

「しばらく時間がかかりますよ。お急ぎではありませんか」

「いいえ」

私はもう少しあの日を思い出したかった。

思い出にひたるなんて年寄りのすることだと思ってたけど、こんな日にはぬるいシャワーのように心地よく、デザートワインのように甘い。

あの時ドレスにワインのシミが残らないように何枚もナフキンをくれたギャルソンと、それを心配そうに見ていた彼とを交互に見ていた私。

「すっかり忘れていたのに妙なものね、食べ物で思い出すなんて」

「レストランはそういう場所なんですよ」

「そのとおりね」

窓の外は変わらぬ街並み。誰もが急に来た春に慌てたように、コートを手を歩いてる。

「そのあと 彼とはうまくいったんですか？」

「それがね...」

なんだか気まずくて、その日はお礼もそこそこにさよならしたのよ。そのあとも何度か彼と会ったけど、楽しいんだけど結局好きにはなれなかった。

「上手に食事ができないようじゃ、つきあうこともダメなのかもしれないわね」

「一緒に食事をすれば相手がわかるって言いますね」

「私は彼のなにがわかったのかしら。謎掛けみたいね」

私は軽く笑った。これ以上つきあえないとわかったのか、それともただつきあうにはお互い未熟だったのか。

「だとしたら 無駄なトラウマだわ。あれからも誰かとレストランへ行くとなんとか緊張するのよ。さすがにワインはこぼさないけど、人と一緒に食事をして楽しいのかしら？」

美味しいとか、そんなことすら思い出せないなんて、私にはレストランへいく資格はないわ。

「私は一人が好きだから」

「それは惜しい話です」

車は右へ曲がり、大きな建物が目立つようになる。

「今度素敵な人があらわれたら、またレストランへ行かれてはどうでしょう。今のあなたならその頃よりずっと楽しい時が過ごせると思いますよ」

「だといいいんだけど。そんな時はいつくるかしらね」

車は目的地についた。駅前の雑多な雰囲気はいつものままで、昔の思い出から一気に現実に引き戻される。

私はメルセデスが次の紳士を乗せるのを見送って 逆の方向へ歩き出した。

日差しの暖かさに夢でも見ていたのかしら。

ひと気のない薄暗くひやりとする地下の通路への階段で、タクシーを降りる時にお釣りと一緒に渡された古いレストランのカードをポケットからもう一度取り出して見つめた。

そのレストランの名は記憶のどこかにあった。さっき運転手が挙げたうちには入っていなかった名前だった。

古い思い出が一気にあふれて、私は背中を壁に預けた。

立っているのがやっとだった。

緊張してたのは楽しくなかったのではなく、想いが強すぎて言葉にならなかったのだと、あの時の幼い私に言い聞かすことができたなら...

忘れたわけじゃない、忘れようとしていただけ。忘れるなんて私にはできない。

ガラスのスプーン・ the short tales

<http://p.booklog.jp/book/88430>

著者：黒野 ている

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/naomur/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88430>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88430>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ